

# 北海道の土偶

長 沼 孝

1. はじめに
2. 研究略史
3. 分布状況
4. 時期別の特徴
5. ま と め

## 1. はじめに

北海道の縄文文化は、地域的特性を強くもっているものの、日本列島全体の縄文文化に包括される。そして、縄文時代前期～中期の円筒土器文化や同晩期の亀ヶ岡文化などは、津軽海峡を挟んで展開している。

土偶は日本の縄文文化を代表する遺物の一つであり、北海道の土偶においても前述の北海道の縄文文化の特徴がみられる。つまり、土偶分布圏の最北端に位置する北海道の土偶は、東北地方北半の影響を強く受けながらも、いくつかの点で独自の特色を見出せる。

以下にまず研究史、分布状況の概要を述べ、次に時期別にその特徴を説明する。

## 2. 研究略史

北海道での土偶の紹介は古く、寛政12(1800)年に村上島之允(秦榎丸)が『蝦夷島奇観』で「當別村(在箱館西五里)氏神祠」の傍より出土したものを図示したのが最初である(村上 1800)(図1)。その後、明治時代では、山中笑(山中 1890)、若林勝邦(若林 1891)、勝毛市五郎(勝毛 1908)ら、大正時代から昭和初期では塩田弓吉(塩田 1912)、大野延太郎(大野 1917)、小田桐劍二(小田桐 1917)、柴田常恵(柴田 1918)、甲野勇(甲野 1925)、杉山寿栄男(杉山 1928)らの地名表、紹介、論巧などがみられる。その状況を東京帝国大学編集・発行の『日本石器時代人民遺物発見地名表』(東京帝国大学 1897・1898・1901・1917・1928)でみると、北海道における土偶出土遺跡の確認は以下のような状況である。

**第一版** 明治30(1897)年

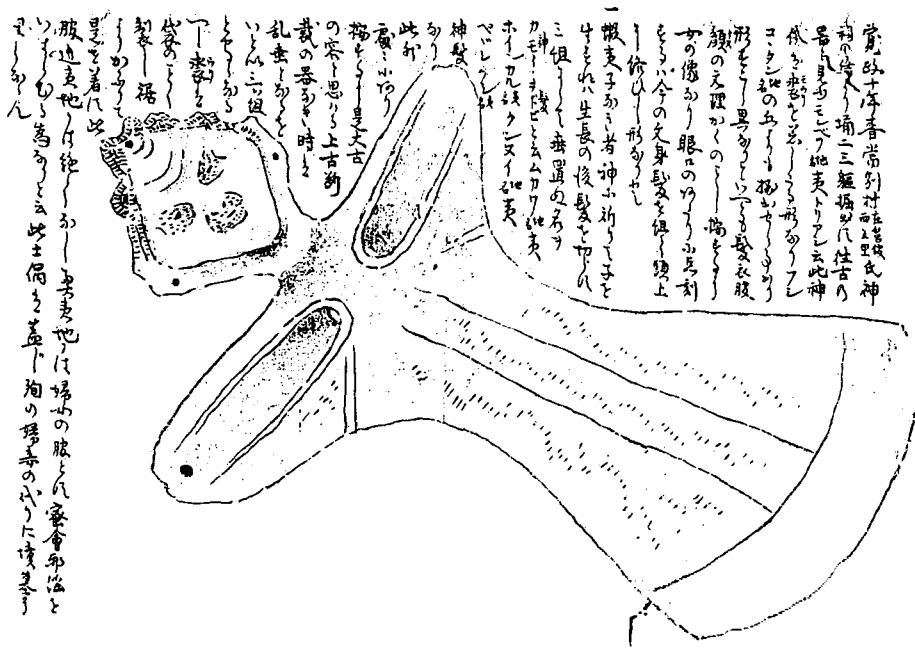


図1 寛政12年『蝦夷島奇観』の土偶

- |                          |                      |   |
|--------------------------|----------------------|---|
| 1                        | 渡島国 亀田郡トウベツ村         | 中山 笑 50 (「中山」は山中の誤り)                        |
| <b>第二版 明治31 (1898) 年</b> |                      |   |
| 1                        | 渡島国 亀田郡トウベツ村         | 山中 笑 50                                     |
| <b>第三版 明治34 (1901) 年</b> |                      |   |
| 1                        | 渡島国 亀田郡トウベツ村         | 山中 笑 50                                     |
| <b>第四版 大正6 (1917) 年</b>  |                      |   |
| 1                        | 渡島国 亀田郡湯川村           | 勝毛市五郎 269, 大野延太郎 358                        |
| 2                        | 〃 〃 トウベツ             | 山中 笑 50                                     |
| 3                        | 〃 上磯郡上磯村             | 大野延太郎 358                                   |
| 4                        | 石狩国 上川郡旭川町春光台, 火薬庫附近 | 塩田弓吉 310                                    |
| 5                        | (補遺) 渡島国 上磯郡當別       | 小田桐剣二 363                                   |
| <b>第五版 昭和3 (1928) 年</b>  |                      |   |
| 1                        | 渡島国 函館市谷地頭町及尻沢辺町     | 勝川貞治 33, 石毛市五郎 269<br>(「勝川」は石川, 「石毛」は勝毛の誤り) |
| 2                        | 〃 亀田郡湯川村             | 勝毛市五郎 269, 大野延太郎 358                        |
| 3                        | 〃 〃 トウベツ             | 山中 笑 50                                     |
| 4                        | 〃 上磯郡上磯村             | 大野延太郎 358                                   |
| 5                        | 〃 〃 當別               | 小田桐剣二 363                                   |

6	後志国	余市郡余市町大谷地 (貝塚)	五十嵐 鉄, 橋本堯尚
7	石狩国	旭川市春光台, 火薬庫附近	塩田弓吉 310
8	胆振国	室蘭市輪西町日本製鋼所構内	甲野 勇 447
9	〃	〃 〃 ペンホッケ (貝塚)	柴田常恵 375

第一版からみられる「渡島国 亀田郡トウベツ村・トウベツ村・トウベツ」は寛政12 (1800)年に村上島之允が図示したもので、小田桐剣二の紹介した (小田桐 1917)「渡島国 上磯郡當別」と同一と考えられる。さらに甲野勇、柴田常恵報告 (甲野 1925, 柴田 1918)の室蘭市出土の土偶も同一のものであるので、第五版で示された9カ所は、実際は7カ所ということになる。また、大野延太郎が室蘭市絵鞆貝塚出土の土偶を図示 (大野 1917) しているので、昭和初年に知られていた土偶出土地は8カ所ということになる。これら出土が報じられた土偶のうち現存するものは、余市町大谷地貝塚、室蘭市輪西町・絵鞆貝塚出土の3点のみである。

大正、昭和初年の東京人類学会誌での地名表、紹介以後、昭和20年代までは数篇の文献 (名取 1933, 犀川会 1933) しかみられないが、30年代に入ると、道内各地からの資料の紹介、発掘報告 (児玉ほか 1958, 大場・石川 1962, 田川 1956, 松崎 1955, 河野 1954・1955, 河野ほか 1954, 亀井 1956 a・b, 大場・林 1959 ほか) が行われ、さらに全国の土偶を整理、紹介した江坂輝彌の『土偶』(1960)でも函館市サイベ沢、室蘭市絵鞆貝塚、同市輪西町出土のものが写真や図で示されている。

昭和40年代以降、特に50年代においては調査、報告例が数を増すと同時に時期および地域的な特性が明らかになってきた。しかし、それらの特性や全体の状況をまとめて論じたものは少なく、わずかに野村 (1976)、森田 (1986)、長沼 (1990) などがみられるだけである。

### 3. 分布状況

現在、土偶の出土が報告されている遺跡は79カ所、およそ310個体である (図2)。出土遺跡の分布状況は、渡島半島の南半、特に函館周辺が最も多く、次いで石狩低地帯の千歳周辺が多い。その中間部は、太平洋側は噴火湾沿岸、日本海側は積丹半島周辺に散発的に分布している。石狩低地帯より東北部の地域では、不確実なものを含めても5カ所の遺跡があるにすぎない。その状況は、ちょうど東北地方北半の影響を強く受けた前・中期の円筒土器や晩期の亀ヶ岡式土器の分布の様子と符合する。

現時点で、分布の最北端はオホーツク海沿岸、知床半島の付け根の斜里町朱円環状土籬、最東端は根室市初田牛20遺跡である。



は、いずれも軟質の凝灰質泥岩製で、欠損しているが、全体の形状は秋田県大谷地遺跡出土例(江坂 1960, 第二九図版)と類似すると思われる。1点(4)は右側の首, 胸, 腕に相当する破片で、長さは11.5cm, 復元すると長さは34cm, 幅は17cm程度的大型品になるとみられる。

## (2) 中期

この時期の土偶は円筒土器上層式およびその影響を強く受けた土器に共伴する板状のものが大半で、概して小型である。形状は頭と両腕を単純に作り出した十字形に近いものが多いが、足の表現がみられるものもいくつかある。顔の表現はないものが多いが、あるものは太い粘土紐で眉と鼻を連結して表現する特徴がある。また、目や口は単純に刺突によって表現されている。体部の表現は抽象化されたものが多く、刺突文、縄文のみなどのほか全く無文のものもみられる。具体的な表現は乳房や腹部にみられ、小さな突起や縄文原体による円形の圧痕などがある。また、頭部や両腕に縦または横方向の貫通孔がみられるものが多く、何らかの形で垂下して使用されたことが考えられる。

前葉の時期の資料は少なく、余市町フゴッペ貝塚(千葉ほか 1991)(5)、八雲町栄浜1(三浦・柴田 1987)(6)、松前町白坂(久保ほか 1983, 久保 1984)(7~9)遺跡で出土している。

フゴッペ貝塚出土の土偶(5)は、前期末~中期初頭の「フゴッペ式」の住居跡の床面から出土した完形品である。長さ5.7cm, 幅5.0cm, 厚さ1.2cm, 重量21.4gの小型品であるが、頭部と両腕のほか脚の表現もみられる。顔, 胸, 腹部などの表現はみられず、片面に縄文原体の圧痕文が施され、両腕の付け根に縦方向の貫通孔がみられる。

栄浜1遺跡の土偶(6)は、脚を人の字に広げた形状で、体部の中央に楕円形の穴があり、フゴッペ貝塚のものと同様両腕の付け根部分にも縦方向の貫通孔がある。

白坂遺跡の第8地点出土の2点の土偶(7・8)は、前葉の時期の床面から発見された。2点とも小型品で、大きさは長さ, 幅とも5cm前後、形状は十字形である。顔やその他の身体の表現はみられないが、縦または横方向の1本の刺突列が体部に施されている。また、2点とも頭部に横方向の貫通孔がある。出土状況や形態・文様の類似性からみて、この2点の土偶は同一の目的で製作・使用されたものと思われる。

中葉~後葉の時期の資料は数が増えると同時に顔の表現がみられるものも多くなる。函館市サイベ沢貝塚のもの(児玉ほか 1958)(11~14)は古くから紹介されているが、最近では同貝塚(田原 1985, 田原・鈴木 1986)(17)を含め出土例が増え、函館市権現台場(田原ほか 1981)(15)・石川1(長沼ほか 1983a)(21)・桔梗2(長沼ほか 1983b)・陣川町(田原ほか 1989)、松前町白坂(久保ほか 1983)、八雲町栄浜1(三浦・柴田 1983・1987)(10・16・23)、木古内町釜谷4(鈴木ほか 1991)(26)、泊村へロカルウス(川内ほか 1987)(19・24・25)、岩内町東山(大場 1968)(22)、苫小牧市美沢1(森田ほか 1977)(18)、江別市高砂(高橋・直井 1989)(20)遺跡などで26個体が報告されている。

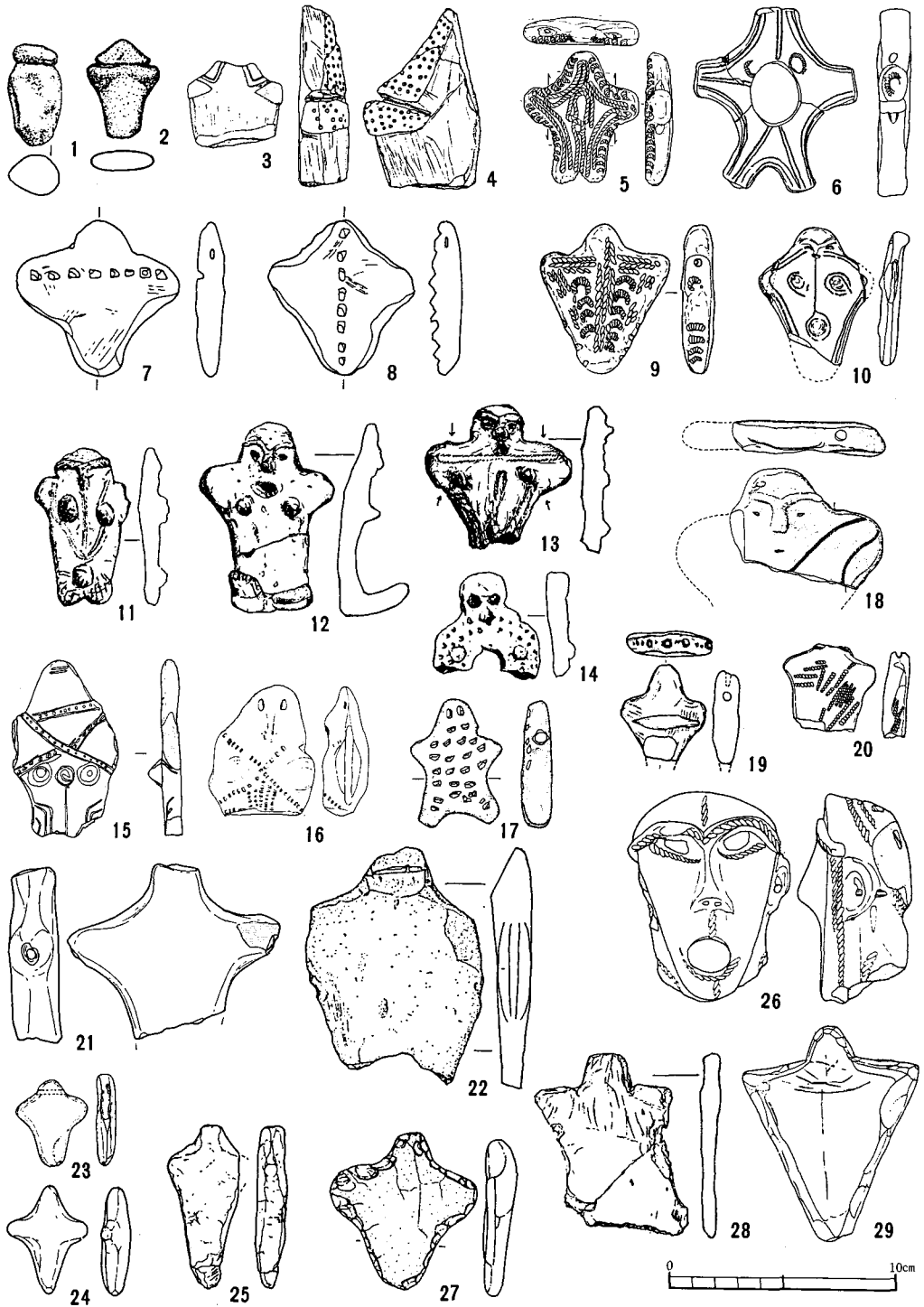


図3 縄文時代前・中期の土偶・岩偶

1・2・11~14・17・28 函館・サイベ沢, 3・4 函館・函館空港第4地点, 5 余市・フゴッペ, 6・10・16・23 八雲・栄浜1, 7~9 松前・白坂, 15 函館・権現台場, 18 苫小牧・美沢1, 19・24・25 泊・ヘロカルウス, 20 江別・高砂, 21 函館・石川1, 22 岩内・東山, 26 木古内・釜谷4, 27 福島・館崎, 29 南茅部・白尻B

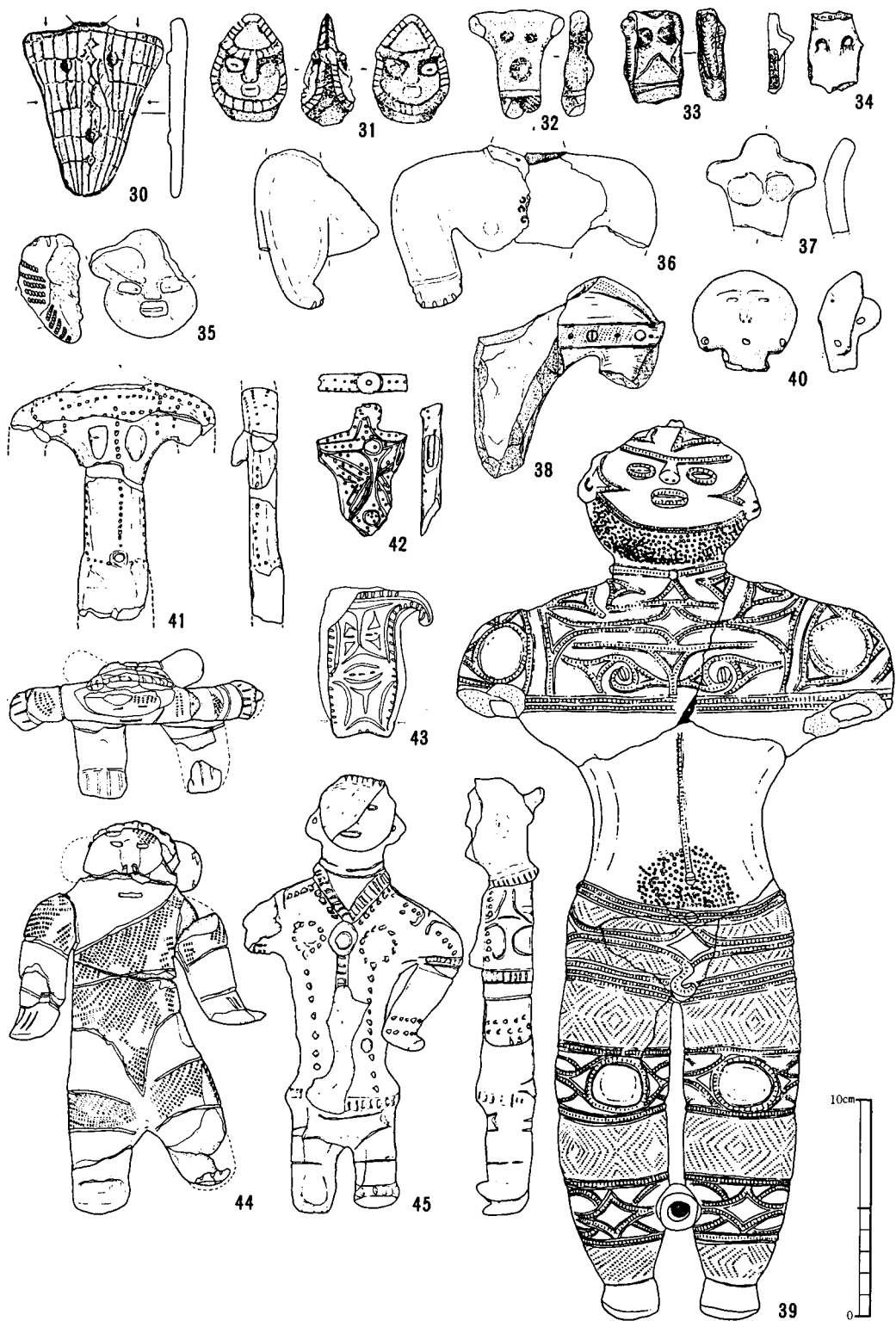


図4 縄文時代後期～晩期初頭の土偶

30 松前, 31・32 函館・日吉, 33 室蘭・絵柄, 34・38 千歳・キウス, 35・36 小樽・忍路土場, 37 千歳・末広, 39 南茅部・著保内野, 40~42 恵庭・柏木B, 43 斜里・朱円, 44 根室・初田牛20, 45 静内・御殿山

古くから知られているサイベ沢貝塚のもの（11～13）は、顔と乳房の表現がみられる好例で、美沢1遺跡のもの（18）にも類似の顔表現がみられる。また、顔、体の表現の全くないもの（21～25）、縄文だけのもの（19・20）など簡略化したものが、道南に限らず道央部にまで分布している。

26個体のうち大部分は板状土偶であるが、桔梗2、釜谷4遺跡の土偶は立体的である。桔梗2遺跡の2例は脚部から腹部にかけての破片で、全体の形状は不明であるが、釜谷4遺跡出土のもの（26）は頭部破片である。顔の部分の大きさは長さ9cm、幅7cm、厚さは5cm、全体を推定すると長さ30cm以上の大型品になる可能性がある。顔の表現はリアルで、眉と鼻は板状土偶同様、つながった隆帯であるが、鼻の断面は三角形に作られ、鼻孔もある。口は楕円形に大きく開き、首までぬけている。また、両耳と後頭部に貫通孔がある。

さらに、この時期には無文の十字形土偶に形状が類似した岩偶が、函館市サイベ沢（児玉ほか 1958）（28）、福島町館崎（佐藤ほか 1958）（27）、南茅部町白尻B（小笠原ほか 1980）（29）、函館市陣川町（田原ほか 1989）遺跡などで出土している。前期の岩偶とは形状、表現、石材などが異なっているので、それらとの関連性よりも、簡略化した無文の十字形土偶との関連を考えた方がよさそうである。

### （3）後期

この時期の土偶は、札幌市T361（田部ほか 1987）、函館市日吉（千代ほか 1971）（31・32）、室蘭市絵柄貝塚（柴田 1918、甲野 1925、大場・石川 1962）（33）、千歳市末広（大谷・田村 1982）（37）・キウス（大場・石川 1967）（34・38）、小樽市忍路土場（種市ほか 1989）（35・36）、富良野市無頭川（杉浦ほか 1988）、松前町内（児玉ほか 1958）、南茅部町著保内野（小笠原 1976）（39）、上磯町茂別（茂辺地）、余市町登町5（小谷地川）（名取・峰山 1968）などで25個体ほどが知られている。しかし、全体の形状が明らかなのは、柴田、甲野紹介の絵柄貝塚例と著保内野例（39）の2例のみであるが、絵柄貝塚のものは晩期の可能性も指摘されている。

前葉と考えられる資料は少なく、サイベ沢遺跡の報告書（児玉ほか 1958）で紹介されている松前町内出土の板状のもの（30）が該当しそうである。

中葉～後葉の時期の資料は、顔の表現に共通性があると同時に、体部の形状・表現が写実的である。日吉（31）、忍路土場（35）、著保内野（39）遺跡出土の3例の顔は、隆帯で表現されたT字形の眉と鼻、楕円形の目と口など、類似性がみられる。また、体部の状況は、忍路土場（36）や著保内野（39）遺跡例のように写実的なものと同時に、中期以来の板状のもの（52～54）もみられる。

著保内野遺跡の土偶（39）は、全長41.5cm、最大幅20.2cm、重量1,745gの大型中空土偶で、全体の形状がわかるものとしてはわが国最大である。畑地の耕作中に偶然発見され、その後の調査で、土墳墓に関連するものであることが指摘されている（小笠原 1976）が、詳細はわからない。



い。顔の長さは約7cm、全長の17%ほどと小さく、眉、目、口は刻目のある細い隆帯で表現され、鼻は断面三角形に作り出され、鼻孔がある。また、顎には円形の小さな刺突が密にみられる。体部や脚部の形状は写実的であるが、乳房のふくらみは小さく、三叉状入組文の中央に直径7.5mmほどの突起があるだけである。腹部は顎と同様の刺突文がみられ、体部上半と下半身は刻目のある隆帯または羽状縄文が施されている。腹部の刺突文は妊婦を、他の表現は何らかの衣服を表現しているようである。また、脚部を筒状の粘土がつないだ部分があり、この筒は足の中空部分とつながっている。おそらく、脚の重さを支えるためと、粘土の乾燥、焼成時の空気抜き役目をするものと思われ、製作に関わる細かな配慮が想定される。

#### (4) 後期末～晩期初頭

この時期の土偶は、いわゆる御殿山式に共伴するもので、墓に関連して千歳市美々4（森田ほか 1984）(47)、恵庭市柏木B（木村・上屋 1981）(40～42)、静内町御殿山（河野ほか 1954、河野・藤本 1961、藤本 1961・1963、古原 1984）(45)、根室市初田牛20（川上ほか 1989）(44) 遺跡などで約24個体が出土している。また、同時期の関連する遺物としては千歳市美々4遺跡の盛土墳墓から出土した動物形土製品（森田ほか 1977、森田 1978）(46)、斜里町朱円環状土籬出土の「土板」と報告されているもの（河野 1954・1955、宇田川 1981）(43)がある。朱円の「土板」は墓墳の底部から他の副葬品とともに発見されたもの（図8）で、頭部と右腕を欠損しているが、土偶と考えてよいものである。

美々4遺跡出土の土偶（47）は、土墳墓の墳底からうつ伏せの状態出土した（図9）。大きさは長さ20cm、最大幅9.5cm、扁平、板状で、手足の先端はつまみ出しで作り出されている。顔は仮面のように平らで、斜め上方を向いている。目と口は横方向の短刻線、鼻は隆帯で表現され、表情は温和な感じを受ける。また、両耳の貫通孔は耳飾、後頭部の突起は櫛を表現していると思われる。乳房は写実的で、下腹部のふくらみもみられる。さらに、肩、下腹部、腰の部分には円形の刺突列がある。

御殿山（45）、初田牛20（44）遺跡出土の土偶は墓域からバラバラの状態出土し、ほぼ全体の状況がわかるまでに接合できた例である。柏木B（41など）遺跡でも墓域に関連して発見されているが、全体の状況がわかるまで接合したものはなく、詳細はわからない。

初田牛20遺跡出土の土偶（44）は、2基の土墳墓に伴って18個の破片の状態で見つかった。頭部、肩、左手、脚などの一部が欠損しているが、ほぼ全体の形状がわかる。大きさは長さ18.2cm、最大幅11.8cm、扁平、板状、首がなく、さらに脚が短く、一見異様な感じを受ける土偶である。手足のつまみ出しや目、口の短刻線による表現などは、美々4遺跡出土の土偶と共通している。乳房や腹部については特別の表現はなく、つまみ出された手足に短刻線による指の表現がある。体部全体は表裏とも沈線による区画と磨消縄文が施されている。

## (5) 晩期

この時期の土偶は、いわゆる亀ヶ岡式土器に伴うグループと在地のタンネトウL式土器に伴うグループの二つに大きく分けられる。東北地方ではいわゆる大型中空の遮光器土偶が大洞B～C<sub>1</sub>式の時期に作られ、C<sub>1</sub>式末期から小型化する(江坂 1960)という。しかし、道内では、前葉の大洞B～B-C式の遺跡が少なく、大型中空の遮光器土偶はみられない。その後、中葉の大洞C<sub>1</sub>～C<sub>2</sub>式の時期になり、渡島半島から噴火湾にかけての遺跡から多数みられるようになる。しかし、古手の大洞C<sub>1</sub>式に相当すると思われる例は少なく、余市町大谷地貝塚(清野 1969)(図7)、室蘭市輪西(柴田 1918, 甲野 1925)、白老町社台1(種市ほか 1981)(51)、南茅部町大船A(千代ほか 1972)(60)、上磯町添山(田川 1956)遺跡などで中空のものが5個体報告されている。また、全体の状況は不明であるが、上磯町久根別A遺跡採取の土偶の中にはいわゆる遮光器土偶の小型品がいくつかみられる。

大谷地貝塚出土の土偶(図7)は「大土偶」と報告されているもの(清野 1969)で、現在は天理大学付属天理参考館に収蔵されている。残存しているのは頭部と体部の上半で、長さは19cm、最大幅は17cm、厚みは6.5cm、現状は、腹部および脚が復元され、長さが30cm程の大きさになっている。頭頂部には王冠状の突起があり、その周りに4つの開口部がある。目は凸レンズ形に細い隆帯で表現され、鼻は小さく、口は楕円形に凹んでいる。顔の大きさの割に耳は大きく、左右とも貫通孔がある。首は長くて太い。肩は左右に張り出し、腕は垂直に下がっているが、短い。体部は雲形文、渦巻文が施され、磨消縄文がみられる。首の部分は無文で、表面が研磨されている。また、一部にわずかながら赤色顔料が残存している。国の重要文化財に指定されている輪西遺跡出土例同様、東北地方の大型中空の遮光器土偶を模したものであろう。

大洞C<sub>2</sub>式の時期に相当する土偶は、他の時期に比べ出土遺跡および個体数が増加する。渡島半島から噴火湾にかけては、函館市亀尾(女名沢)(市立函館博物館 1983, サントリー美術館 1969ほか)・高丘町(田原ほか 1982)、上磯町添山(石本ほか 1983)(66・73)、木古内町札苅(野村 1976, 野村ほか 1974)(61～65・67・68)・新道4(大沼ほか 1987)(70・71・76)、知内町サンナン(野村・仁礼 1975)・湯の里6(畑ほか 1985)、松前町上川(久保 1984)(77)、七飯町聖山(芹沢ほか 1979, 吉崎ほか 1979)(69・72・74)・大中山10(野村 1984)(75)、虻田町高砂貝塚(峰山 1967, 三橋ほか 1987)(48・50・52・53)、苫小牧柏原18(佐藤ほか 1983)遺跡などで約145個体が報告されている。高砂貝塚配石墓の覆土上部から出土した「土偶」(50)は、全体の形状、顔や体部の表現などからみて、亀を模した土製品と考えられる。

この時期の土偶は、1つの遺跡で多量に出土する傾向があり、最も出土数が多いのは聖山遺跡の50個体で、添山遺跡の35個体、札苅遺跡の28個体がそれに次いでいる。また、出土数の多い割りに完形品が少なく、破片の状態で出土することが多いのもこの時期の大きな特徴でもある。

札苅遺跡出土の28個体の土偶は、いずれも板状の省略化の進んだもので、完形に近いものは2

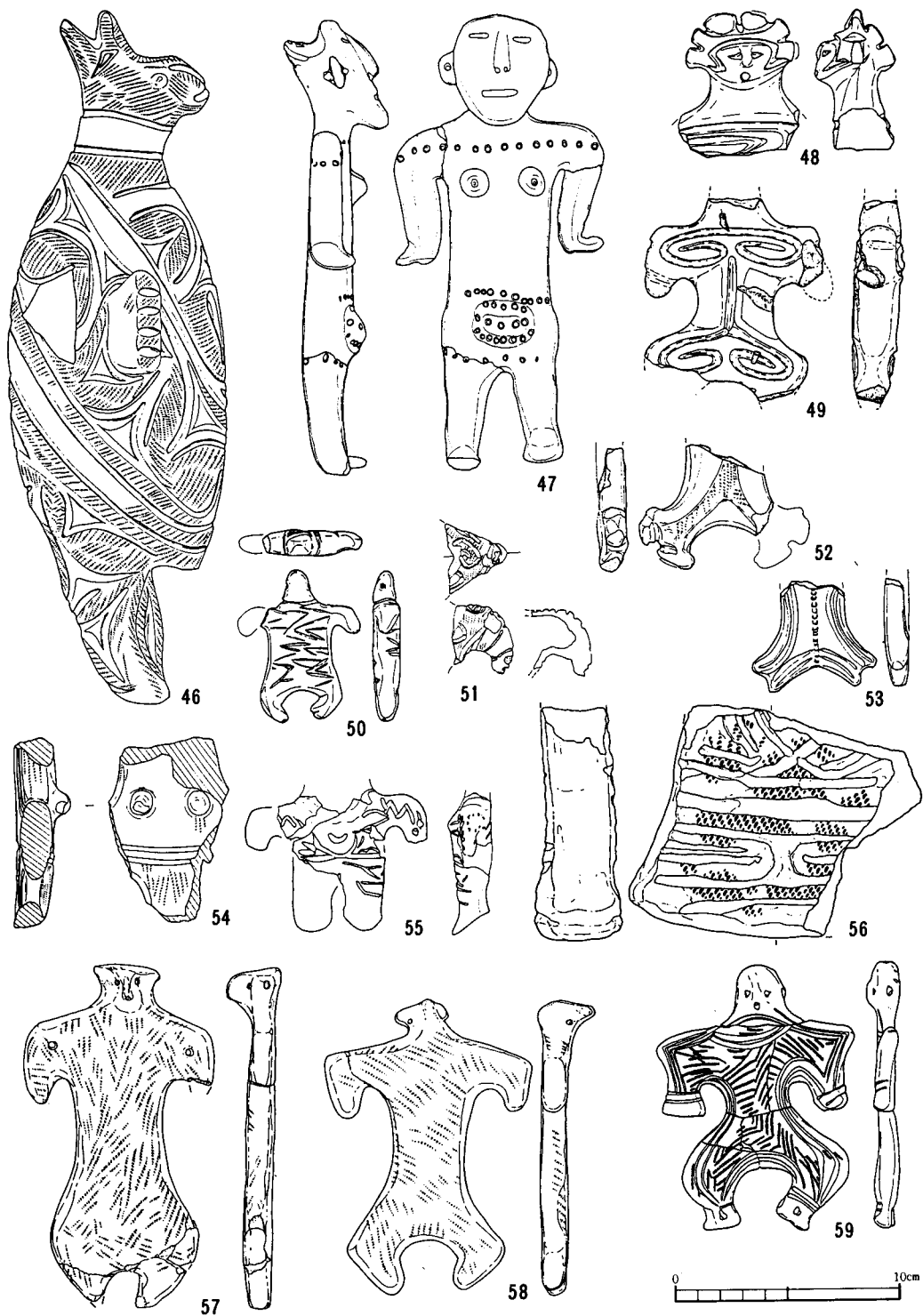


図5 縄文時代晩期の土偶(1)

46・47 千歳・美々4, 48・50・52・53 虻田・高砂, 49・59 苫小牧・柏原18, 51 白老・社台1, 54 石狩・志美第4, 55千歳・ママチ, 56 余市・栄町5, 57・58 江別・大麻3



図6 縄文時代晩期の土偶(2)

60 南茅部・大船A, 61~65・67・68 木古内・札苅, 66・69 上磯・添山, 69・72・74 七飯・聖山, 70・71・76 木古内・新道4, 75 七飯・大中山10, 77 松前・上川



図7 余市町大谷地貝塚出土の土偶（天理大学附属天理参考館蔵）

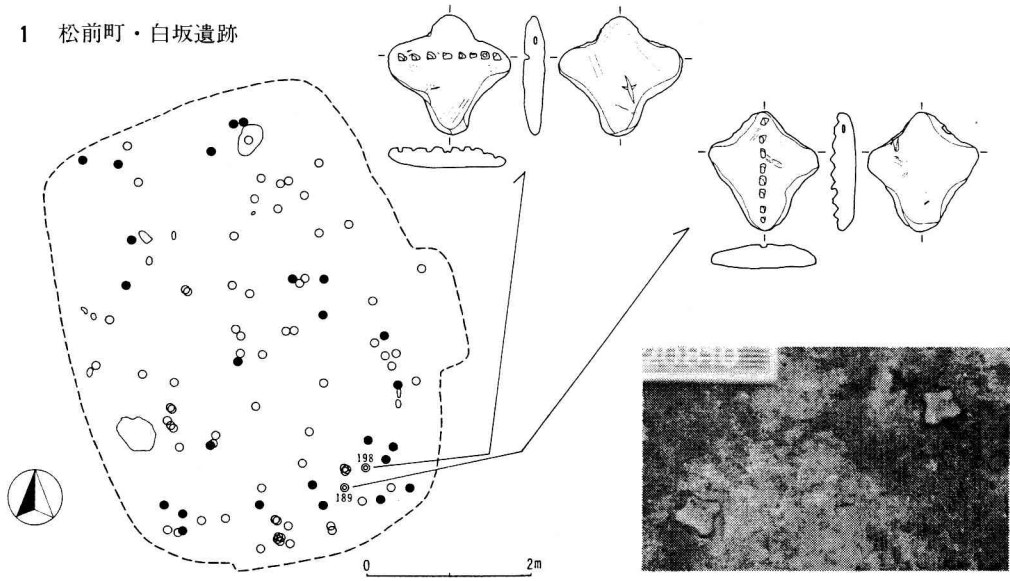
点のみである。残りの26個体の土偶は、四肢、首、胴のいずれかが破損しており、さらに細かくみると、右腕のみはすべて欠損しているという特徴がある。右腕をかならず破壊するという土偶祭式の存在が想定されている（野村 1976）。

後葉の時期になると道央部の出土例が増え、余市町栄町5遺跡（長沼ほか 1990）出土の大型板状土偶（56）は粗い作りながら、工字文が施され、同様なもので全体の状況がわかるものは同町登川遺跡（名取・峰山 1968）でも採取されている。おそらく、これらの土偶は、道央部における縄文文化終末期の在地化された亀ヶ岡文化の様子を示すもので、形態は異なるが、同種のものである。石狩町志美第4（石橋ほか 1979）（54）、千歳市ママチ（種市ほか 1983）（55）、泊村堀株（名取・峰山 1968）遺跡などでも発見されている。

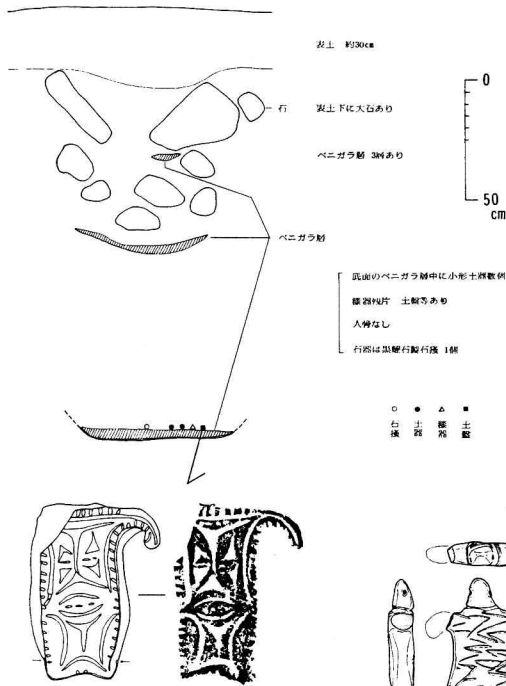
タンネットウL式土器は、終末期に位置付けされる土器型式で、道央から道東北部に分布し、道東では幣舞式とも呼ばれている。このグループの土偶は道央部の苫小牧市柏原18（佐藤ほか 1983）（59）、江別市大麻3（高橋・園部 1986）（57・58）、千歳市ウサクマイ（大場 1965）、余市町大川（犀川会 1933、名取 1933）遺跡などで5個体が報告されている。これらの土偶はいずれも板状で、乳房や下腹部のふくらみは全くみられない。また、首がなく、手足が短く、全面に縄文が施されている。ウサクマイ遺跡の出土例は股間に張り出しがあり、男性土偶と紹介されている。5個体はいずれも完形で、亀ヶ岡式土器に伴う土偶に完形品が少ないのとは対照的である。

大麻3遺跡出土の2個体（57・58）の土偶は、土壌の壁から背中合わせに重なった状態で発見された。2個体の土偶は、下の方（57）が上のもの（58）に比べやや大きく、肩から腕と胴から

1 松前町・白坂遺跡



2 斜里町・朱円環状土離



3 虻田町・高砂貝塚

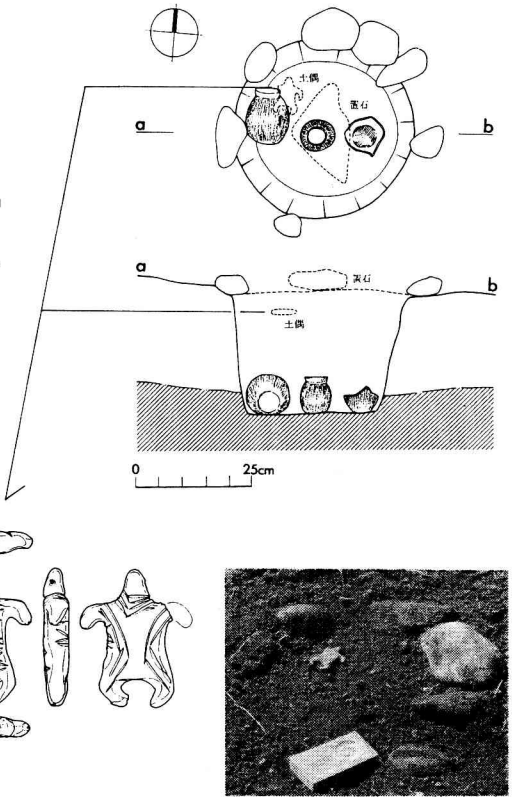
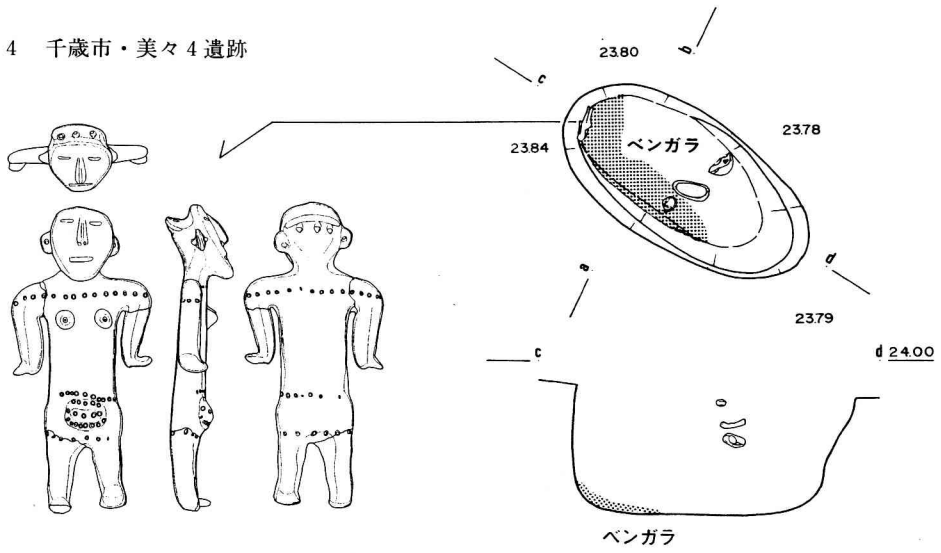


図8 土偶の出土状況(1)

4 千歳市・美々4遺跡



5 江別市・大麻3遺跡

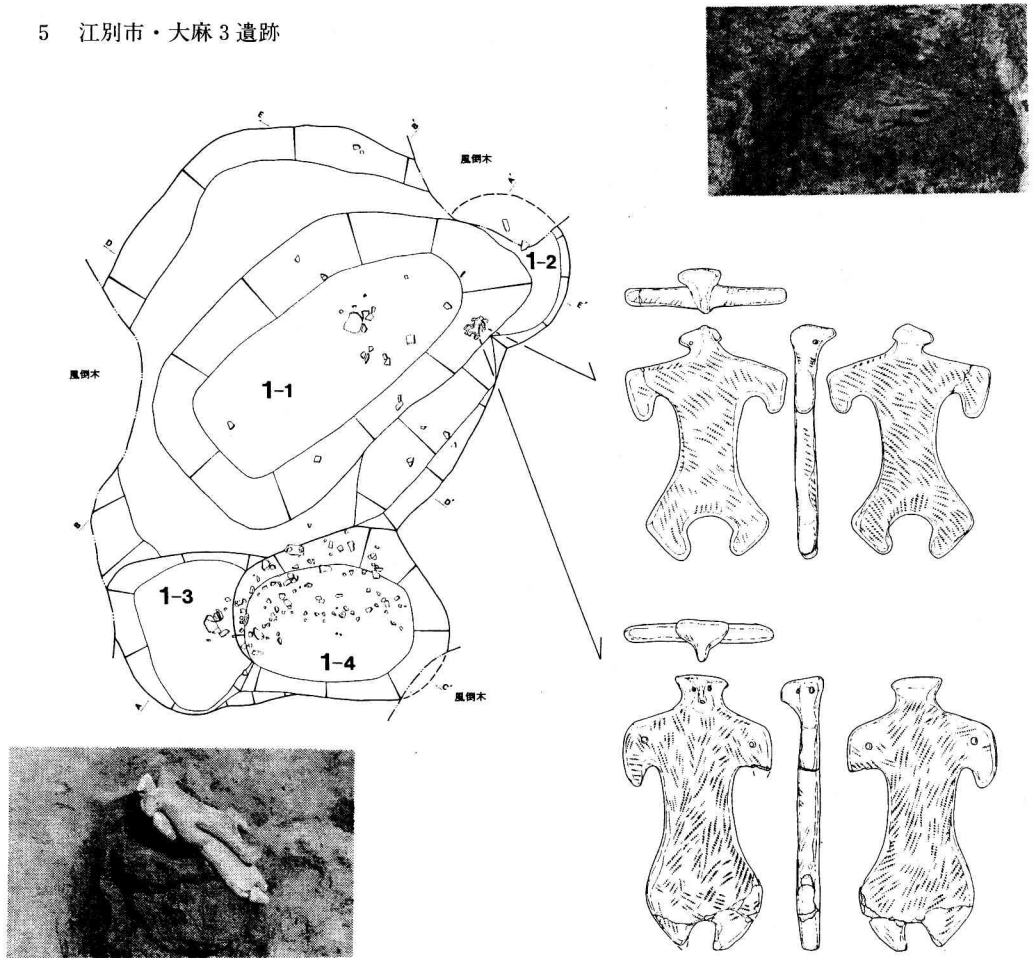


図9 土偶の出土状況(2)

脚の外形線が丸味をもつ、という違いがみられる。しかし、頭部の形状や顔の表現、乳房や腹部のふくらみが全くない点、全面に斜行縄文が施された体部の状態など共通する特徴がある。形態の違いは性差などを示す可能性もあるが、同一の目的で製作・使用され、土壌に置かれたものと考えられる。

## 5. ま と め

時期的にその特徴や傾向をみてきたが、まとめると以下の様になる。

- (1) 縄文時代早・前期の確実な土偶はないが、関連するものとして岩偶が出土している。
- (2) 縄文時代中期の土偶は、集落遺跡の包含層または住居跡から出土し、形状は単純な十字形に近いものが多い。そして、ほとんどのものの頭部、首、腕のいずれかに縦または横方向の貫通孔が一つないし二つみられる。何らかの形で、垂り下げて使用されたことが考えられる。おそらく、集落ないし特定の住居に伴う土偶祭祀の存在が想定でき、その祭祀の終了とともに廃棄されたものと考えられる。
- (3) 縄文時代後期および後期末～晩期初頭の土偶は、土壙墓または墓域から完形またはほぼ完形に復元できる状態で出土する機会が多い。土壙墓から発見される場合は副葬品と思われ、完形に近い形で出土する。一方、墓域から発見される場合はいくつかの破片の状態で出土し、何らかの形で意識的に破壊されたことが考えられる。いずれにしても埋葬儀礼の一つとして土偶祭祀が存在したようである。このような状況は他の地域ではみられない、北海道的な土偶祭祀の特徴で、後期末葉にみられる周堤墓または環状土籬と呼ばれる北海道独特の墓制を生みだした精神文化と深く関連しているものと思われる。
- (4) 縄文時代晩期の土偶は、大きく二つのグループに分けられる。亀ヶ岡式土器に共伴するグループは、損壊した状態で一つの遺跡から多数出土する傾向があり、土偶を何らかの目的のために破壊する祭祀の存在が考えられる。一方、終末期のタンネットウL式土器に共伴するグループは、数は少ないがすべて完形に近い状態で発見されている。また、千歳市ママチ遺跡の土壙墓に伴った土製仮面（長沼ほか 1987）も在地文化を代表するもので、土偶類も土製仮面同様、埋葬儀礼に関係する可能性がある。

縄文時代中期～晩期の時期にみられる北海道の土偶は、隣接する東北地方の円筒・亀ヶ岡文化の影響を強く受けるものの、墓との強い関連性、完形または完形品に近い状態まで復元できるものが多いことなど、他の地域とは異なった特徴を見出すことができる。

### 引用文献

- 石橋孝夫ほか 1979 『SHIBISIUSU II』 石狩町教育委員会  
 石本省三ほか 1983 『添山』 上磯町教育委員会  
 宇田川 洋 1981 『河野広道ノート』 考古学篇1 北海道出版企画センター



- 江坂輝彌 1960 『土偶』 校舎書房
- 大谷敏三・田村俊之 1982 『末広遺跡における考古学的調査(下)』 千歳市教育委員会
- 大沼忠春ほか 1987 『建川2・新道4遺跡』 (財)北海道埋蔵文化財センター
- 大野延太郎 1917 「北海道発見の土偶」 『人類学雑誌』32-2 東京人類学会
- 大場利夫 1965 「男性土偶について」 『考古学雑誌』50-4 日本考古学会
- 大場利夫 1968 「北海道の石偶及び岩偶」 『北海道考古学』4 北海道考古学会
- 大場利夫・石川徹 1962 『室蘭遺跡』 室蘭市・室蘭市教育委員会・市立室蘭図書館
- 大場利夫・石川徹 1966 『恵庭遺跡』 恵庭町・恵庭町教育委員会
- 大場利夫・石川徹 1967 『千歳遺跡』 千歳市・千歳市教育委員会
- 大場利夫・林登美彦 1959 『北村古代史』 北村教育委員会
- 小笠原忠久 1976 「北海道著保内野出土の中空土偶」 『考古学雑誌』61-4 日本考古学会
- 小笠原忠久ほか 1980 『白尻B遺跡』 南茅部町教育委員会
- 小田桐剣二 1917 「北海道に於ける土偶の分布(上)」 『人類学雑誌』32-7 東京人類学会
- 勝毛市五郎 1908 「北海道に於ける新発見の石器時代遺跡」 『東京人類学会雑誌』269 東京人類学会
- 亀井喜久太郎 1956 a 「厚真出土の土偶」 『先史時代』3 先史学同好会
- 亀井喜久太郎 1956 b 「厚真村古代史」 厚真村教育委員会・厚真村郷土研究会
- 川内 基ほか 1987 『ヘロカルウス遺跡』 北海道文化財研究所
- 川上 淳ほか 1989 『初田牛20遺跡発掘調査報告書』 根室市教育委員会
- 木村英明・上屋真一 1981 『柏木B遺跡』 恵庭市教育委員会
- 清野謙次 1969 『日本貝塚の研究』 岩波書店
- 久保 泰 1984 「原始・古代の松前」 『松前町史』 通説編第一巻上 松前町
- 久保 泰ほか 1983 『白坂』 松前町教育委員会
- 熊石町 1967 「文化財を大切に」 『広報くまいし』115
- 甲野 勇 1925 「北海道室蘭郡輪西村発見の石器時代土偶」 『人類学雑誌』40-1 東京人類学会
- 河野広道 1954 「先史時代の遺跡」 『網走道立公園知床半島学術調査報告』 網走道立公園審議会
- 河野広道 1955 「斜里町史先史時代史」 『斜里町史』 斜里町
- 河野広道ほか 1954 『静内町先史時代遺跡調査報告』 静内町役場
- 河野広道・藤本英夫 1961 「御殿山墳墓群について」 『考古学雑誌』46-4 日本考古学会
- 児玉作左衛門ほか 1958 『サイベ沢遺跡』 市立函館博物館
- 古原敏弘 1984 『御殿山遺跡とその周辺における考古学的調査』 静内町教育委員会
- 犀川会 1933 『北海道原始文化聚英』
- 佐藤一夫ほか 1983 『苫小牧東部工業地帯埋蔵文化財発掘調査概要報告書』Ⅴ 苫小牧市教育委員会
- 佐藤忠雄ほか 1985 『館崎遺跡』 福島町教育委員会
- サントリー美術館 1969 『土偶と土面』
- 塩田弓吉 1912 「北海道に於ける石器時代遺跡遺物所在地」 『人類学雑誌』28-1 東京人類学会
- 柴田常恵 1918 「室蘭より石器時代の土偶を発見す」 『人類学雑誌』33-7 東京人類学会
- 市立函館博物館 1983 『児玉コレクション目録』Ⅰ 先史・考古資料編
- 杉浦重信 1988 『無頭川遺跡』 富良野市教育委員会
- 杉山寿栄男 1928 『日本原始工芸』
- 鈴木正語ほか 1991 『釜谷4遺跡』 木古内町教育委員会
- 芹沢長介ほか 1979 『峠下聖山遺跡』 七飯町教育委員会
- 高橋正勝・園部真幸 1986 『大麻3遺跡』 江別市教育委員会
- 高橋正勝・直井孝一 1989 『高砂遺跡(5)』 江別市教育委員会
- 田川賢蔵 1956 「上磯出土の土偶について」 『先史時代』3 先史学同好会
- 田部 淳ほか 1987 『札幌市文化財調査報告書XXIX』 札幌市教育委員会
- 種市幸生ほか 1981 『社台1遺跡・虎杖浜4遺跡・千歳4遺跡・富岸遺跡』 (財)北海道埋蔵文化財センター
- 種市幸生ほか 1983 『ママチ遺跡』 (財)北海道埋蔵文化財センター
- 種市幸生ほか 1989 『忍路土場遺跡・忍路5遺跡』 (財)北海道埋蔵文化財センター
- 田原良信 1985 『サイベ沢遺跡』 函館市教育委員会
- 田原良信ほか 1981 『権現台場遺跡発掘調査報告書』 函館市教育委員会

- 田原良信ほか 1982 『高丘町遺跡発掘調査報告書』 函館市教育委員会  
 田原良信ほか 1990 『陣川町遺跡』 函館市教育委員会  
 田原良信・鈴木正語 1986 『サイベ沢遺跡Ⅱ』 函館市教育委員会  
 千葉英一ほか 1986 『湯の里3遺跡』 (財)北海道埋蔵文化財センター  
 千藤英一ほか 1991 『フゴッペ貝塚』 (財)北海道埋蔵文化財センター  
 千代 肇 1972 「大船遺跡」『北海道南茅部町の先史』 南茅部町教育委員会  
 千代 肇ほか 1971 『函館市日吉遺跡発掘報告書』 函館市日吉遺跡発掘調査団・市立函館博物館  
 千代 肇ほか 1977 『函館空港第4地点・中野遺跡』 函館市教育委員会  
 東京帝国大学 1897 『日本石器時代人民遺物発見地名表』 第一版  
 東京帝国大学 1898 『日本石器時代人民遺物発見地名表』 第二版  
 東京帝国大学 1901 『日本石器時代人民遺物発見地名表』 第三版  
 東京帝国大学 1917 『日本石器時代人民遺物発見地名表』 第四版  
 東京帝国大学 1928 『日本石器時代遺物発見地名表』 第五版  
 長沼 孝 1990 「北海道の土偶」『季刊考古学』 雄山閣出版  
 長沼 孝ほか 1988 a 『石川1遺跡』 (財)北海道埋蔵文化財センター  
 長沼 孝ほか 1988 b 『桔梗2遺跡』 (財)北海道埋蔵文化財センター  
 長沼 孝ほか 1987 『ママチ遺跡Ⅲ』 (財)北海道埋蔵文化財センター  
 長沼 孝ほか 1990 『栄町5遺跡』 (財)北海道埋蔵文化財センター  
 名取武光 1933 「故篠岡亮一氏の蒐集せる北海道先史的遺物の紹介」『考古学雑誌』23-3 日本考古学会  
 名取武光・峰山 巖 1968 「登の土偶とホリカップの土偶」『北海道の文化』15 北海道文化財保護協会  
 野村 崇 1976 「木古内町札刈遺跡出土の土偶にみられる身体破損について」『北海道考古学』12 北海道考古学会  
 野村 崇 1984 「北海道の亀ヶ岡文化」『北海道の研究』1 考古篇 清文堂  
 野村 崇ほか 1974 『札刈遺跡』 木古内町教育委員会  
 野村 崇・仁礼秀道 1975 「北海道知内町サンナン遺跡出土の縄文晩期遺物について」『古代文化』27-8 古代学協会  
 畑 宏明ほか 1985 『湯の里遺跡群』 (財)北海道埋蔵文化財センター  
 藤本英夫 1961 「御殿山ケールン群墳墓遺跡について」『民族学研究』26-1 日本民族学会  
 藤本英夫 1963 『GOTENYAMA—plates—』 静内町教育委員会  
 松崎岩穂 1955 「桧山郡に存在する先史時代の遺跡 上ノ国村」『桧山南部の遺跡』 上ノ国村教育委員会・江差町教育委員会  
 三浦孝一・柴田信一 1983 『柴浜』 八雲町教育委員会  
 三浦孝一・柴田信一 1987 『柴浜1遺跡』 八雲町教育委員会  
 三橋公平ほか 1987 『高砂遺跡』 札幌医科大学解剖学第二講座  
 峰山 巖 1967 「高砂遺跡の配石遺構」『北海道の文化』12 北海道文化財保護協会  
 村上島之允 1800 『蝦夷島奇観』  
 森田知忠 1978 「北海道千歳市・美々4遺跡出土の動物形土製品」『考古学雑誌』64-3 日本考古学会  
 森田知忠 1986 「北海道の土偶」『郷土の科学』97 郷土と科学編集委員会  
 森田知忠ほか 1977 『美沢川流域の遺跡群Ⅰ』 北海道教育委員会  
 森田知忠ほか 1979 『美沢川流域の遺跡群Ⅲ』 北海道教育委員会  
 森田知忠ほか 1984 『美沢川流域の遺跡群Ⅶ』 (財)北海道埋蔵文化財センター  
 山中 笑 1890 「縄文土器はアイヌの遺物ならん」『東京人類学会雑誌』5-50 東京人類学会  
 吉崎昌一ほか 1979 『聖山』 七飯町教育委員会  
 若林勝邦 1891 「貝塚土偶=就テ」『東京人類学会雑誌』61 東京人類学会

## 挿図引用文献

図1 村上 1800

図3 1・2・11~14・28 児玉ほか 1958, 3・4 千代ほか 1977, 6・10 三浦・柴田 1987, 7  
 ~9 久保ほか 1983, 15 田原ほか 1981, 16・23 三浦・柴田 1983, 田原・鈴木 1986,

- 18 森田ほか 1977, 19・24・25 川内ほか 1987, 20 高橋・直井 1989, 21 長沼ほか 1988,  
22 大場 1968, 26 鈴木ほか 1991, 27 佐藤ほか 1985, 29 小笠原ほか 1980
- 図4 30 児玉ほか 1958, 31・32 千代ほか 1971, 33 大場・石川 1962, 34・38 大場・石川 1967,  
35・36 種市ほか 1989, 37 大谷・田村 1982, 39 小笠原 1976, 40~42 木村・上屋 1981,  
43 宇田川 1981, 44 川上 1989, 45 古原 1984
- 図5 46 森田 1978, 47 森田ほか 1984, 48・50・52・53 三橋ほか 1987, 49・59 佐藤ほか 1983,  
51 種市ほか 1981, 54 石橋ほか 1979, 55 種市ほか 1983, 56 長沼ほか 1990, 57・58  
高橋・園部 1986
- 図6 60 千代 1972, 61~65・67・68 野村ほか 1974, 66・73 石本ほか 1983, 69・72・74 芹沢  
ほか 1979, 70・71・76 大沼ほか 1987, 75 野村 1984, 77 久保 1984
- 図7 天理大学付属天理参考館
- 図8 1 久保ほか 1983, 2 宇田川 1981, 3 三橋ほか 1987
- 図9 4 森田ほか 1984, 5 高橋・園部 1986

(北海道教育庁)